

法蔵が『密厳経』の心識を解説するために『起信論』を援用したことに依って逆に彼の『起信論』理解が明確になったといえる。すなわち三細六塵と対応する『起信論』の心識説は、五意中の現識(『密厳経疏』では顯識)が迷妄心生起の直接的起点となり、加えて智識と相統識こそが妄心の主要なる内容となしているのである。

アーラヤ識の存在論証

——減定証の考察——

宮下晴輝

アーラヤ識が存在しないならばどうして無心定が在り得ないのか。なぜならば「もしそれが存在しないならば」、無想定や減盡定に入つたものには、識が身体を離れ去ってしまうであろうからである。「実は無心定に入つても識は身体を」離れ去ることはない。だから死にはしないのである。世尊は次のように説いておられる——「その人にも識は身体を離れ去らない」と。

① 瑜伽行派の諸論書にみられるアーラヤ識の存在論証は『瑜伽師地論』撰決択分中にある八種の存在論証を原型としていふと考えられる。ここに引いた一文はそのうちの第七番目、いわゆる減定証と呼ばれるものである。そしてこの減定証はアーラヤ識の存在論証中でも特に重要な意義をもっていると考えられる。

というのは、すでに何度か紹介されてきた瑜伽行派の空觀と密接な関連を示していると思われるからである。瑜伽行派の空觀はパーリ所伝の『小空経』に述べられているような内容を源としているといわれている^②。『小空経』の場合、種々の想を作意し、ある想よりも一層空である想のもとに、その想における思いを離れ、更にその一層空であった想そのものの思いをまたそれよりも一層空である想のもとに離れるという仕方では、四無色定に到り、更にそれを超えて無相心定にまで到る。ここに最後の思いとして残った「命を縁としてある六処を具えた身体」が不空なるものとして如実に觀察されることになる。他方、このような空觀は『中辺分別論』においても述べられているが、そこでは最後に残る不空なるものは「虚妄分別」であるとされている。『中辺分別論』における虚妄分別という概念はアーラヤ識そのものを意味し得る^③。従って瑜伽行派のいうアーラヤ識はこのような禪定の過程を通して初めて見出されてきたのであろうと考えられるのである。ところで冒頭に出した一文中に引用されている經文は他の諸論書における減定証の核をなすと考えられるが、減盡定においても識が存在するということは、禪定の終極点においてすら対治されることのない識が存在していることをも語るものであるから、この場合の識も最後に残る不空なるものを意味するといえるであろう。従って減盡定中に身体を離れ去らない識を、アーラヤ識と論定していく減定証は、アーラヤ識が禪定という經驗のなかで問い尋ねられてきたものであることを傍証しているという意味で、特に重要な意義をもつといえる。

以下『撰大乘論』における減定証を取り挙げ特に世親の註解の特質を取り出してみたい。

『撰大乘論』によれば、^⑦ [A]減盡定とは転識の対治として生ずるものであるから、先の経文にある減定中の識とは異熟識であると先ず論定し(§50)、また[B]その異熟識は結生相統の時以外に再び生ずることはないものであるから、出定時に再び生ずることになる識とは転識なのであり、従って減定中の識とは異熟識であると述べている(§51)。次に減定中の識が異熟識以外の識とすると共に帰結する難点を挙げ、異熟識以外では在り得ないことを論証する。^⑧ [C]また減盡定中に意識が存在するから有心なのであると考えられるものがある。この場合もその心は適切ではない(§52)。なぜなら、(i)定として不適切であるが故に(§52-1)。 (ii)所縁と形相が認知されないが故に(§52-2)。 (iii)不善や無記として不適切であるから善根との相応を帰結するが故に(§52-3)。 (iv)触が認知されるから想や受の現行を帰結するが故に(§52-4)。 (v)想の減のみを帰結するからその「受を生ずる」機能が定中に存在することになるが故に(§52-5)。 (vi)思や信等の善根の現行を帰結するが故に(§52-6)。 (vii)所依より能依を分かつことはできないが故に(§53-1)。 (viii)喩例が存在するが故に(§53-2)。 (ix)遍行であるからそのように存在するものではないが故に(§53-3)。 (x)善・不善・無記は妥当しないが故にこれらもまた不適切なのである(§54)。

世親の註解によれば、(i)～(v)項は特定の転識を認める立場に対する難点であり、(vi)項は意識が存在するとする立場における難点を

述べたものであるとされている。また(v)項に対する註解は『成業論』における記述と類似するところが多い。^⑨ ところで世親は(v)項の註解を終えて次のような結語を置いている。

異熟識のことをこそ世尊は「彼の」識という語をもって説かれたのであると考えられるから、それ故に出定時に一切の種子を有するものより転識が生ずることになるのであると認められるのである。^⑩

本論の[A][B]項は、経文に言うところの減定中の識を論定するという観点から叙述されているのであるが、この世親の結語には、出定時に再び心が生ずる因となるものは何かという観点をみてとることができる。

[D]また色と心が無間に生ずることが諸法の種子性であると考えるものたちがいる。これも前と同じように不適切であり、さらに無色「界」や無想「天」より退没し、また減盡定より出た者にとっても、このことは不適切である。等無間縁としては適切であることを除けば、阿羅漢の最後心も在り得なくなってしまう(§55)。

ここには、出定時に心が生ずる因は何かという観点を見出すこともできるが、D項そのものは、アーラヤ識以外に諸法の種子を考えようとする立場を批判したものであって、減定証の中に組み入れることはできない。

ところで減盡定無心説あるいは有心説というのは、出定時に心が生ずる因は何かという問いのもとに論じられるという一面がある。その典型は『俱舍論』である。そこで先ず無心説として、

過去の心が等無間縁となるという Vaibhāṣika の説と、心と有根身が互いに種子となるという Sautrāntika の説と、意識をめぐって有心とする世友の説とが紹介されている。^④ 『成業論』にも、同様の観点から、『俱舍論』と一致した記述が見出される。また『大乘五蘊論』においては、四種の存在論証があり、その第一は「なぜなら滅盡定や無想定や無想から出て、対象を識知するといわれる転識が再び生ずることになるから〔アーラヤ識が存在するのゆゑある〕とらうものゆゑあり、これも出定時の因とらう観点をめぐってする滅定証といえる。これに対する安惠の註解には、先ず Vaibhāṣika の入定心が等無間縁となるという説を述べ、いわゆる三世実有説を批評して、次に Sautrāntika の有根色と心が互いに種子となるという説を取り挙げ、次に滅定中も識は身を離れなうという経文を引いて以下その識の論定を『成業論』と同様な記述のもとに行い、アーラヤ識からこそ転識が生ずると述べている。^⑤

さて世親の滅定証を論ずる態度は以上のようになつて出定時と心の生ずる因は何かという観点から先ずなされており、従つて先の『撰大乘論』註解における結語も、これらの三著作と同様の観点をもちてなされたのゆゑであると考へられる。

- ① Vinīścayasamgrahaṇī Peking ed. vol. 110 p. 235, 3b⁸.
4a² cf. Abhidharmasamuccayabhāṣya ed. by Tatia. p. 13.
- ② 長尾雅人「余れるもの」印仏研第 12 巻 2 号
向井亮「瑜伽論」の空性説―『小空経』との関連を探る―
「印仏研第 22 巻」2 号
- ③ MN. No. 121, vol. III, pp. 104-109.

④ Madhyāntavibhāṣabhāṣya ed. by Nagao p. 18.

⑤ Shīramati's Tīkā ed. by Yamaguchi p. 30 tatra ye *tasmād abhūtaparikalpīn* narakādākārā viṃśatiprakārahā pravartante sa kāmadhātūh.

⑥ 山口若著「世親の成業論」p. 171. 註③参照。Vinīśadeva 註 Trīṃśikā の註釈に於て「この經は Chos byin gyi mdo sde (dharmaśāstra) の註に於てある」とある。ed. by Takeda p. 511 N. Hakamaya "Nirodhasamāpatti" 印仏研第 22 巻 2 号参照。

⑦ Mahāyānasamgraha ed. by Lamotte ch. 1 § 50-§ 55.

⑧ Vasubandhu's Bhāṣya Peking ed. vol. 112 p. 281, 164a⁴⁻⁵, p. 282, 166a². Asvabhāva 註「たゞたゞ意識を認るる立場は必ずしも強調して、性非 Asaṅga の本論に一致するものではない。その場合(即ち)の内容が重複するものがある。Peking ed. vol. 113 263b^{4,5,6}, 264b².

⑨ ibid. p. 282, 166a²-166b⁸, p. 283, 167a^e-167b⁵ Karmasiddhi, ed. by Yamaguchi § 17. pp. 16-20.

⑩ Vasubandhu's Bhāṣya 167b⁴⁻⁵.

⑪ Abhidharmakośabhāṣya ed. by Pradhan pp. 72-73.

⑫ Karmasiddhi ed. by Yamaguchi pp. 15-21.

⑬ Pañcaskandhaprakaraṇa Peking ed. vol. 113, p. 238, 17a²⁻³.

⑭ Shīramati's Vibhāṣya Peking ed. vol. 114 p. 21, 47b²⁻³. p. 22, 50a^e.